幼児の発達に即した種子遊びの教材化

学 籍 番 号：5111001
氏　　名：石原綾子

１.研究の目的

種子は小さいものや大きいもの、オナモミのように引っ付くものなど様々な色や形、特徴を持っている。種子で遊ぶことにより幼児は自然の形の面白さや多様な自然の事物に気付くことができるのではないか。そして、幼児期に豊かな原体験を保育に取り入れることは、幼児の科学の芽を養い、将来の小学校理科の内容につながる重要な経験になるのではないかと考えた。幼児の科学の芽を養うにはただ種子で遊ぶだけではなく、幼児の発達に応じた遊びを行ったり種子はなぜできるのかといった命のつながりを伝えたりすることが必要であると思う。

そこで本研究では、幼児の発達の特徴を明らかにするとともに発達に応じた種子遊びの環境構成の教材化を行うことを目的とする。

２.研究内容

第１章では、ピアジェや保育所保育指針、幼稚園教育要領などから幼児の発達の特徴を捉えた。次に、原体験の視点から遊びを定義し、人間が生きていくうえで基本的な感覚となる五感を身につけるには幼児期から様々な自然体験を行うことが重要であることが分かった。ホイジンガ・青柳は、遊びを「命令されない」「強制させられない」ものだと定義している。遊びは自発的に始めるものであり、「やってみたい」と思わせる環境構成が必要であると学んだ。また、子どもは遊びを通して多くのことを学ぶため、子どもにとって遊びは必要度の高い行動であることが分かった。

第２章では、年齢別の幼児の発達の特徴を表にまとめ、その表をもとに発達に応じた遊びの分類を行った。幼児の発達が進むにつれて、遊びは個から集団へ、受動的から能動的へ、単純な内容から複雑な内容へ、のように内容が幅広く高度なものになっていくことが分かった。種子を使った遊び・おもちゃを製作するに

あたって、種子の散布方法についてまとめた。そのことから、種子にはひっつくものや風に飛ばされるものなどそれぞれに特徴があることが分かった。種子の特徴にあった遊び方を「首飾り・ブレスレット」「置物・人形」「音をだす」「ひっつける」「飛ばす」「その他」の６つの項目に分けてまとめた。

第３章では身近な自然物を使ってどのようなものを制作することができるか、またそれを保育にどう取り入れることができるかを考察することを目的に学生への調査を行った。学生の作った作品をもとに、作品の用い方（遊び方）を４種類に分類し、発達段階に位置づけて表に示した。作品は貝殻や雪、土など様々な自然物を利用していた。同じ自然物でも使い方は人それぞれで、自然物は幅広い遊びに使用できる素材であることが分かった。

３.考察

種子の教材化についての研究を通し、ただ素材を使って遊ぶのではなく、素材一つ一つの特徴を生かし、幼児の発達に適した遊びになるように教材研究を行うことが重要であると学んだ。現代では人工物の玩具で遊ぶことが当たり前となり、テレビやインターネットなどを通しての間接的な体験の機会が増え、幼児が直接自然と触れ合う機会が少なくなっている。人間が生きる上で基盤となる五感を身に付けるためには、幼児期から様々な自然とかかわる体験を行うことが必要である。

種には、とぶ種やひっつく種など種特有の特徴があり、飾りとしての素材だけではなくオナモミダーツやタンポポの種飛ばしなど種そのもので遊ぶことができる有効な素材であることが分かった。また、種に限らず製作に自然物を使うことで、自然に興味をもつことや見立て遊びを活かした造形表現を行うことができると考える。

種遊びを通して自然と関わるとともに、種から芽が出て花が咲き、また種ができるといった命のつながりについても子どもたちに知って欲しいと思う。

（指導教員　福井広和）